

病害虫発生予報 第 3 号 (6 月予報)

和歌山県農作物病害虫防除所

< 予報の概要 >

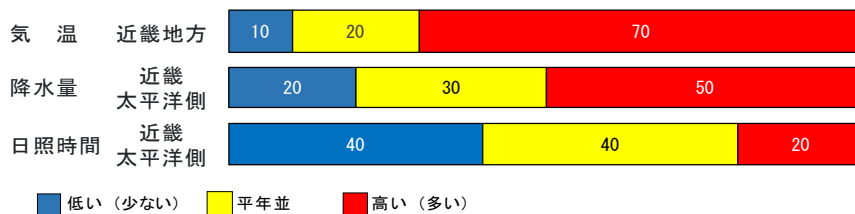
作物名	病害虫名	発生量	作物名	病害虫名	発生量
水 稻	いもち病	並	ナ ス	アブラムシ類	並
	ヒメトビウンカ	並		ハダニ類	やや少
	縞葉枯病	並		ミナミキイロアザミウマ	やや少
	ツマグロヨコバイ	並	ミカンキイロアザミウマ	並	
	セジロウンカ	並	カ ン キ ッ ツ	黒点病	やや多
	トビイロウンカ	並		かいよう病	並
イネミズゾウムシ	やや少	ミカンハダニ		やや少	
キュウリ	モザイク病	並	カ キ	ヤノネカイガラムシ	並
	べと病	並		チャノキイロアザミウマ	並
	うどんこ病	やや少		アブラムシ類	やや少
	褐斑病	並	モ モ	うどんこ病	並
ミナミキイロアザミウマ	並	円星落葉病		やや少	
ミカンキイロアザミウマ	やや少	角斑落葉病		並	
スイカ	モザイク病	並	キウイフ	カキクダアザミウマ	並
	つる枯病	並		チャノキイロアザミウマ	並
	炭疽病	並		フジコナカイガラムシ	並
	疫病	並	果 樹 全 般	せん孔細菌病	やや多
	うどんこ病	並		カイガラムシ類	並
	シロイチモジヨトウ	やや多		キウイフ	かいよう病
	アブラムシ類	並	ル ー ツ		
	ハダニ類	やや多			
ミカンキイロアザミウマ	並				

気象予報

近畿地方 1 か月予報 (05/23~06/22)

2026年05月21日14時30分 大阪管区气象台 発表		
特に注意を要する事項	期間の前半は、気温がかなり高くなる見込みです。	
向こう1か月 05/23~06/22	天候	近畿日本海側では、期間の前半は、天気は数日の周期で変わるでしょう。期間の後半は、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。近畿太平洋側では、期間の前半は、天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。期間の後半は、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。
	気温	平均気温は、高い確率70%です。
	降水量	降水量は、近畿日本海側で平年並または多い確率ともに40%、近畿太平洋側で多い確率50%です。
	日照時間	日照時間は、近畿太平洋側で平年並または少ない確率ともに40%です。
1週目 05/23~05/29	気温	1週目は、高い確率80%です。
2週目 05/30~06/05	気温	2週目は、高い確率50%です。
3~4週目 06/06~06/19	気温	3~4週目は、高い確率60%です。

向こう 1 か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率 (%)



I. 水 稲

1. いもち病（苗いもち、葉いもち）

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 低温、日照不足、長雨が続く条件で発生しやすい。

② 県南部の早植え地域の常発地では気象条件に注意し、発生を認めたら直ちに薬剤防除を行う。

③ 県北部、県中部の普通期栽培地域では、「コシヒカリ」、「キヌヒカリ」などの罹病性品種を作付けする場合には育苗箱施薬剤を施用する。

④ 田植え後の余り苗を水田に放置しない。

2. ヒメトビウンカおよび縞葉枯病

(1) 予報内容 ヒメトビウンカ 発生量 並
縞葉枯病 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 予察灯による5月1～20日の誘殺数は、紀の川市0頭（平年0頭）、上富田町1頭（平年0頭）、那智勝浦町0頭（平年0.2頭）であった。

② 県北部および中部の本田における前年のイネ縞葉枯病の発生面積率は0%（平年2%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① イネ苗へのヒメトビウンカの飛来を防ぐため、雑草地付近での育苗を避ける。

② 田植え時はヒメトビウンカに効果がある育苗箱施薬剤を施用する。

③ 第2世代成虫は6月中旬頃に水田に飛来し、第3世代幼虫の発生最盛期は6月下旬頃と考えられることから、前年に縞葉枯病の発生が認められた地域では、この時期の幼虫を対象に追加防除を行う。

3. ツマグロヨコバイ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 予察灯による5月1～20日の誘殺数は、紀の川市、上富田町および那智勝浦町でいずれも0頭（平年：紀の川市0頭、上富田町0.1頭、那智勝浦町0頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 田植え時にツマグロヨコバイに効果がある育苗箱施薬剤を施用する。

4. セジロウンカ

(1) 予報内容 発生時期 並 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 5月20日現在、県内の予察灯（紀の川市、上富田町、那智勝浦町）への飛来は認められていない（平年の5月1～20日の誘殺数：紀の川市0.1頭、上富田町0.3頭、那智勝浦町0.6頭。平年の初飛来日：5月11日）。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 田植え時にセジロウンカに効果がある育苗箱施薬剤を施用する。

② フィプロニル剤に対する感受性低下が報告されている。

5. トビイロウンカ

(1) 予報内容 発生時期 並 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 5月20日現在、県内の予察灯（紀の川市、上富田町、那智勝浦町）への飛来は認められていない（平年の5月1～20日の誘殺数：紀の川市0頭、上富田町0.1頭、那智勝浦町0頭。平年の初飛来日：6月15日）。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 田植え時にトビイロウンカに効果がある育苗箱施薬剤を施用する。
② イミダクロプリド剤、クロチアニジン剤、チアメトキサム剤に対する感受性低下が報告されている。

6. イネミズゾウムシ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 予察灯による5月1～20日の誘殺数は、紀の川市0頭（平年0.1頭）、上富田町0頭（平年13.9頭）、那智勝浦町12頭（平年11.3頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① イネミズゾウムシに効果がある育苗箱施薬剤を施用していないほ場で、田植え3～7日後に成虫による食害株率が30%あるいは成虫が1株あたり0.5頭を超える場合は、直ちに薬剤防除を実施する。

※ 水稲害虫の発生動向については、鳥獣害対策課ウェブページ内農作物病虫害防除所の水稲害虫の予察灯誘殺消長も参考にする。

II. 野 菜

<キュウリ>

1. モザイク病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の施設栽培キュウリにおける5月中旬の発生ほ場率は0%（平年0%）であった。
② 県中部の施設栽培キュウリにおける5月中旬の発生ほ場率は0%（平年0%）であった。
③ アブラムシ類の発生は平年並と予想される。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① アブラムシ類の防除を行う。

2. ベと病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の施設栽培キュウリにおける5月中旬の発生ほ場率は50%（平年47%）、発病葉率は3.4%（平年5.3%）であった。
② 県中部の施設栽培キュウリにおける5月中旬の発生ほ場率は75%（平年66%）、発病葉率は17.1%（平年15.2%）であった。
③ 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 施設栽培では換気を十分に行い、湿度低下を図る。
② 薬剤防除は予防散布を重点に、薬液が葉裏に十分かかるように行う。

3. うどんこ病

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 県北部の施設栽培キュウリにおける5月中旬の発生ほ場率は0%（平成：発生ほ場率17%、発病葉率1.1%）であった。

② 県中部の施設栽培キュウリにおける5月中旬の発生ほ場率は58%（平成：75%）、発病葉率は11.8%（平成20.4%）であった。

③ 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 施設栽培やトンネル栽培では風通しを良くし、薬剤防除は薬液が葉裏にも十分かかるよう丁寧に散布する。

4. 褐斑病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部の施設栽培キュウリにおける5月中旬の発生ほ場率は10%（平成9%）、発病葉率0.2%（平成0.3%）であった。

② 県中部の施設栽培キュウリにおける5月中旬の発生ほ場率は0%（平成：発生ほ場率34%、発病葉率8.2%）であった。

③ 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 施設栽培では換気を十分に行い、湿度低下を図る。

② 罹病葉や収穫後の残さは速やかに処分する。

③ 資材に付着した病原菌の胞子が伝染源になるので、支柱等再利用する資材は栽培終了後に消毒する。ネットやマルチ等は更新する。

5. ミナミキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県中部の施設栽培キュウリにおける5月下旬の発生ほ場率は55%（平成53%）、生息葉率は2.7%（平成5.3%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 発生の多い場合は4～5日間隔で2回以上、薬剤を散布する。

② 施設栽培では、栽培終了後に抜根した上で7～10日間以上施設を密閉して死滅させ、後作や周辺の野菜等での発生源とならないようにする。

③ ミナミキイロアザミウマは、キュウリ黄化えそ病の病原ウイルスであるメロン黄化えそウイルスを媒介する。

6. ミカンキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 県中部の施設栽培キュウリにおける5月下旬の発生ほ場率は0%（平成：発生ほ場率15%、生息葉率2.8%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① ミナミキイロアザミウマに準ずる。

<スイカ>

1. モザイク病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部の露地栽培スイカにおける5月中旬の発生ほ場率は0%（平成0

%)であった。

② 県中部の露地栽培スイカにおける5月下旬の発生ほ場率は0% (平年0%)であった。

③ アブラムシ類の発生は平年並と予想される。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① アブラムシ類の防除を行う。

2. つる枯病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部の露地栽培スイカにおける5月中旬の発生ほ場率は0% (平年0%)であった。

② 県中部の露地栽培スイカにおける5月下旬の発生ほ場率は0% (平年0%)であった。

③ 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 梅雨期の降雨にともない株元から発病するので、薬剤散布にあたっては薬液が株元にも十分かかるように行う。

3. 炭疽病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部の露地栽培スイカにおける5月中旬の発生ほ場率は0% (平年0%)であった。

② 県中部の露地栽培スイカにおける5月下旬の発生ほ場率は0% (平年：発生ほ場率7%、発病葉率0.6%)であった。

③ 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 6月以降の露地条件で降雨が続くと、病斑上の胞子が雨滴などで飛散するため被害が拡大しやすい。降雨前の予防散布に努める。

4. 疫病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部の露地栽培スイカにおける5月中旬の発生ほ場率は0% (平年0%)であった。

② 県中部の露地栽培スイカにおける5月下旬の発生ほ場率は0% (平年0%)であった。

③ 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 薬剤防除は予防散布を重点に、6月上旬頃から定期的に行う。

② ほ場の排水を良くし、マルチ、敷わらを行う。

5. うどんこ病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部の露地栽培スイカにおける5月中旬の発生ほ場率は0% (平年0%)であった。

② 県中部の露地栽培スイカにおける5月下旬の発生ほ場率は0% (平年0%)であった。

③ 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 施設栽培やトンネル栽培では風通しを良くし、薬剤防除は薬液が葉裏にも十分かかるよう丁寧に散布する。

6. シロイチモジヨトウ

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

- ① 県中部の露地および施設栽培スイカにおける5月中旬の発生ほ場率は9%、生息葉率0.1%、被害果率0%（平年：発生ほ場率5%、生息葉率0.1%、被害果率0.2%）であった。
- ② フェロモントラップによる5月1～20日の誘殺数は、御坊市77頭（平年29.2頭）であった。
- ③ 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 若齢幼虫を対象に初期防除に努める。
- ② 幼虫は作物の生長点付近の未展開葉の芯部に潜入するので、薬剤による防除効果が上がりにくい。初期は局部的に発生するので、管理作業時に見つけしだい捕殺する。
- ③ 施設栽培では、栽培終了後に20日程度施設を密閉して死滅させ、後作の発生源にならないようにする。

7. アブラムシ類

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県中部の露地および施設栽培スイカにおける5月中旬のワタアブラムシの発生ほ場率は55%（平年62%）、生息葉率は1.1%（平年3.0%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 薬剤抵抗性の発達を遅らせるために、同一系統の薬剤は連用しない。
- ② 薬剤散布にあたっては薬液が葉裏に十分かかるように行う。

8. ハダニ類

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

- ① 県中部の露地および施設栽培スイカにおける5月中旬のカンザワハダニの発生ほ場率は73%（平年58%）、生息葉率は7.6%（平年5.6%）、ナミハダニの発生ほ場率は18%（平年5%）、生息葉率は0.4%（平年0.7%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 薬剤抵抗性の発達を遅らせるために、同一系統の薬剤は連用しない。
- ② 薬剤散布にあたっては薬液が葉裏に十分かかるように行う。

9. ミカンキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県中部の露地および施設栽培スイカにおける5月中旬の発生ほ場率は0%（平年：発生ほ場率2%、生息葉率0.0%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 発生の多い場合は4～5日間隔で2回以上、薬剤を散布する。
- ② 施設栽培では、栽培終了後に抜根した上で7～10日間以上施設を密閉して死滅させ、後作や周辺の野菜等での発生源とならないようにする。

<ナス>

1. アブラムシ類

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部の施設栽培ナスにおける5月中旬のモモアカアブラムシの発生ほ場率は0%（平年：発生ほ場率1%、生息葉率0.0%）、ワタアブラムシの発生ほ場率は10%（平年4%）、生息葉率は0.3%（平年0.1%）であった。

② 黄色水盤（紀の川市）の5月1～20日の飛来数は49頭（平年175頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 薬剤抵抗性の発達を遅らせるために、同一系統の薬剤は連用しない。

② 薬剤散布にあたっては薬液が葉裏に十分かかるように行う。

2. ハダニ類

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 県北部の施設栽培ナスにおける5月中旬のカンザワハダニの発生ほ場率は0%（平年：発生ほ場率14%、生息葉率0.1%）、ナミハダニの発生ほ場率は0%（平年：発生ほ場率4%、生息葉率0.3%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 薬剤抵抗性の発達を遅らせるために、同一系統の薬剤は連用しない。

② 薬剤散布にあたっては薬液が葉裏に十分かかるように行う。

3. ミナミキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 県北部 やや少

(2) 予報の根拠

① 県北部の施設栽培ナスにおける5月中旬の発生ほ場率は0%（平年：発生ほ場率21%、生息葉率3.3%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 発生の多い場合は4～5日間隔で2回以上、薬剤を散布する。

② 施設栽培では、栽培終了後に抜根した上で7～10日間以上施設を密閉して死滅させ、後作や周辺の野菜等での発生源とならないようにする。

③ ミナミキイロアザミウマは、キュウリ黄化えそ病の病原ウイルスであるメロン黄化えそウイルスを媒介する。

4. ミカンキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部の施設栽培ナスにおける5月中旬の発生ほ場率は0%（平年：発生ほ場率0%、生息葉率0%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① ミナミキイロアザミウマに準ずる。

Ⅲ. 果 樹

<カンキツ>

1. 黒点病

- (1) 予報内容 発生量 やや多
- (2) 予報の根拠
 - ① 6月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 5月下旬までに薬剤散布を実施していないほ場では早急（6月上旬）に防除を行う。
 - ② マンゼブ剤またはマンネブ剤を用いる場合、散布後の累積降水量が200～250mmとなった時点、または1か月を経過した時点のどちらかの早いタイミングで次の散布を行う。
 - ③ 伝染源となる枯枝や剪定枝の処理を徹底する。

2. かいよう病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 予察ほ場（無防除、有田川町奥）における越冬病斑の発病葉率は7.3%（平年9.4%）であった。
 - ② 前年10月中旬の県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における春葉発病の発生ほ場率は21%（平年21%）、発病葉率は1.0%（平年0.6%）であった。
 - ③ 6月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 薬害対策を講じた上で銅水和剤の予防散布を行う。
 - ② 罹病枝葉の剪除と防風垣や防風ネットの整備に努める。

3. ミカンハダニ

- (1) 予報内容 発生量 やや少
- (2) 予報の根拠
 - ① 予察ほ場における5月中旬の100葉あたりの雌成虫数は、無防除区5頭（平年34.7頭、多発年であった令和元年を除いた過去9年の平均12.8頭）、マシン油乳剤を散布している慣行防除区4頭（平年0頭）であった。
 - ② 6月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 薬剤抵抗性対策としてマシン油乳剤の散布を励行する。マシン油乳剤の散布は発生初期に行うと高い防除効果が得られる。

4. ヤノネカイガラムシ

- (1) 予報内容 発生時期 やや早
 - 第1世代1齢幼虫最盛期 5月18～22日
 - 同 2齢幼虫最盛期 6月9～18日
 - 同 雌成虫初発日 6月12～16日発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 予察ほ場（無防除、有田川町奥）における第1世代1齢幼虫の初発は5月5日（平年5月11日）であった。
 - ② 前年10月中旬の発生ほ場率は3%（平年5%）、寄生果率は0.1%（平年0.3%）であった。
 - ③ 6月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 防除適期の2齢幼虫最盛期にネオニコチノイド系等の殺虫剤を散布する。

5. チャノキイロアザミウマ

- (1) 予報内容 発生量 並

- (2) 予報の根拠
- ① 予察ほ場（無防除）における黄色粘着トラップによる5月1～20日の誘殺数は由良町23頭（平成23.4頭）、有田川町2頭（平成11.3頭）であった。
 - ② 6月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① 地域での発生活長調査の結果を参考にするとともにほ場内の観察に努め、適期に薬剤散布を行う。
 - ② 防風樹のイヌマキやサンゴジュの近くでは発生が多くなるので、特に丁寧に薬剤防除を行う。

6. アブラムシ類

- (1) 予報内容 発生量 やや少
- (2) 予報の根拠
- ① 予察ほ場（無防除、有田川町奥）における5月中旬の発生新梢率は0%（平成1.7%）であった。
 - ② 6月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① 各ほ場で発生状況を観察し、適期防除に努める。

<カ キ>

1. うどんこ病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
- ① 県北部における5月中旬の「富有」での発生ほ場率は24%（平成18%）、発病葉率は0.4%（平成0.5%）、「刀根早生」・「平核無」での発生ほ場率は10%（平成11%）、発病葉率は0.1%（平成0.1%）であった。
 - ② 6月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① 伝染源となる病斑上の分生子は、6月以降活発に形成され伝染を繰り返す。病原菌は葉裏の気孔から侵入するため、薬剤防除にあたっては葉裏にも丁寧に薬液を散布する。

2. 円星落葉病

- (1) 予報内容 発生量 やや少
- (2) 予報の根拠
- ① 前年10月の「富有」における発生ほ場率は14%（平成39%）、発病葉率は0.6%（平成3.3%）であった。
 - ② 6月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① 子のう胞子飛散は、5月上中旬から始まり、5月下旬～7月中旬の降雨後に多い。二次感染はしない。
 - ② 薬剤防除は、5月から8月までマンゼブ水和剤、マンネブ水和剤、有機銅水和剤等を定期的に予防散布する。

3. 角斑落葉病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
- ① 前年10月の「富有」における発生ほ場率は86%（平成75%）、発病葉率は9.6%（平成13.0%）であった。
 - ② 6月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 分生子による感染は5月上中旬から始まり、7月中下旬まで続く。二次感染を繰り返す。
- ② 薬剤防除は円星落葉病に準ずる。

4. カキクダアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部における5月中旬の発生ほ場率は0%（平成0%）であった。
- ② 予察ほ場（無防除、紀の川市粉河）における黄色粘着トラップによる4月21日～5月20日の誘殺数は1頭（平成0.7頭）であった。
- ③ 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 防除適期は新成虫飛来期の6月上中旬である。

5. チャノキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 予察ほ場（無防除、紀の川市粉河）における黄色粘着トラップによる4月21日～5月20日の誘殺数は2頭（平成3.4頭）であった。
- ② 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 防除適期は新成虫飛来期の6月中下旬である。

6. フジコナカイガラムシ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部における5月中旬の「富有」での発生ほ場率は0%（平成2%）、寄生花蕾率は0%（平成0.1%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 防除適期であるふ化幼虫発生盛期の6月上中旬に薬剤を散布する。多発ほ場では特に丁寧な散布を心がける。

<モ モ>

1. せん孔細菌病

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

- ① 県北部における5月中旬の葉での発生ほ場率は80%（平成60%）、発病葉率は2.0%（平成2.0%）であった。
- ② 県北部における5月中旬の果実での発生ほ場率は22%（過去8年の平均14%）、発病果率は0.4%（同0.5%）であった。
- ③ 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 防風ネット、防風樹の設置などの防風対策を励行する。

2. カイガラムシ類

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部における5月中旬のカイガラムシ類（ウメシロカイガラムシ・クワシロカイガラムシ・ナシマルカイガラムシ）の寄生枝の発生ほ場率は0%（平成6%）、寄生枝率は0%（平成0.3%）であった。

- ② 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 防除適期であるふ化幼虫発生盛期に薬剤を散布する。多発ほ場では特に丁寧な散布を心がける。
- ② 近年の第2世代ふ化幼虫発生盛期は、ウメシロカイガラムシが7月1～5日頃、クワシロカイガラムシが7月11～15日頃、ナシマルカイガラムシが7月21日～8月5日頃である。ほ場の主な発生種に合わせて薬剤散布を行う。

<キウイフルーツ>

1. かいよう病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部における5月中旬の発病葉の発生ほ場率は0%（過去7年の平均0%）であった。
- ② 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 新梢の萎れ・黒変や樹液の漏出がみられる枝は、前年枝の基部から切除する。
- ② 作業に使用した器具類（ハサミ、ノコギリ等）は70%エタノールで消毒する。
- ③ 風当たりの強いほ場では、防風対策を行う。

<果樹全般>

1. カメムシ類

(1) 予報内容 発生量 多

(2) 予報の根拠

- ① 紀の川市粉河の予察灯における5月1～20日の誘殺数は、チャバネアオカメムシが3,021頭（前年94頭、平年481頭）、ツヤアオカメムシが908頭（前年79頭、平年193頭）であった。
- ② 有田川町奥の予察灯における5月1～20日の誘殺数は、チャバネアオカメムシが2,200頭（前年38頭、平年126頭）、ツヤアオカメムシが3,750頭（前年56頭、平年306頭）であった。
- ③ みなべ町東本庄の予察灯における5月1～20日の誘殺数は、チャバネアオカメムシが894頭（前年58頭、平年218頭）、ツヤアオカメムシが8,826頭（前年336頭、平年1,575頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 果樹カメムシ類の飛来量はほ場間差が大きいので、ほ場内での発生および被害状況を観察し、防除は発生に応じて早めに行う。
- ② 山林に隣接するほ場でカメムシ類の飛来する時期が早いので、このようなほ場では特に注意が必要である。
- ③ ウメの被害は品種間差が大きい。小梅類等の収穫の早い品種で集中して加害される傾向があるので、これらの品種では特に注意が必要である。
- ④ カンキツでは幼果が加害されるので、被害状況を観察して防除する。
- ⑤ カキでは「富有」で被害が大きいため、特に注意が必要である。
- ⑥ 今後の発生動向については、農作物病害虫防除所の果樹カメムシ情報 (<https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/072000/d00216368/kajukame.html>) や、各地域の振興局農業水産振興課、JA等の情報を参考にする。
- ⑦ 令和8年度病害虫発生予察注意報第1号（令和8年4月23日発表）を参照する。

本情報は、下記の方法でもご覧頂けます。

○鳥獣害対策課ウェブページ <農作物病虫害防除所>

<https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/072000/d00216368.html>

○和歌山県ホームページ <わかやま県政ニュース>

<http://wave.pref.wakayama.lg.jp/news/kensei/>

※詳しくは、農作物病虫害防除所の各担当までお願いします。

水稲、野菜、花き

本所（紀の川市、農業試験場内）

TEL 0736-64-2300

カンキツ

有田川駐在（有田川町、果樹試験場内）

TEL 0737-52-4320

カキ、モモ

紀の川駐在（紀の川市、果樹試験場かき・もも研究所内）

TEL 0736-73-2274

ウメ

みなべ駐在（みなべ町、果樹試験場うめ研究所内）

TEL 0739-74-3780